

## 伝道者アウグスティヌス

——『説教』213における「信条の伝達」、その翻訳——

本 城 仰 太

今回の『神学』86号の主題は「伝道者論」であり、2025年1月の教職セミナーのテーマは「福音の担い手：伝道者論をめぐって」である。古代教会や古代教父の包括的な「伝道者論」を論じることは至難の業であるため、本稿ではヒッポのアウグスティヌスの「信条の伝達」(traditio symboli)を取りあげたい。

ケリーの研究に代表されるように<sup>1)</sup>、信条が洗礼にかかわりを持つケースとして二つが存在している。一つは、全体の儀式のクライマックスとして洗礼が授けられる時である。志願者が洗礼槽の水の中に入り、三つの質問（あなたは父・子・聖霊を信じるか）が問われ、「私は信じます (credo)」とそれらに答える。そのようにして水の中に入れられ、洗礼が授けられる。もう一つは、洗礼式に向けての準備段階での宣言的信条の「伝達」と「復唱」である。たいていの場合には洗礼式の一週間前、司教（もしくは聖職者）が志願者に信条の言葉を講解しながら「信条の伝達」(traditio symboli)を行った。そして志願者は「伝達」された信条を自分のものとすべく暗記し、「信条の復唱」(redditio symboli)を行った。このような「伝達」と「復唱」の実践は、初代教会における多くの教会で見られることであり<sup>2)</sup>、アウグスティヌスの『説教』にも複

1) J. N. D. ケリー『初期キリスト教信条史』(服部修訳、一麦出版社、2011年) の第2章「信条と洗礼」を参照。

2) 東方では、エルサレムのキュリロスの『教理講話』(348年頃) を挙げることができ、エルサレムで行われていた洗礼前教育や洗礼式、さらには洗礼後教育の様子を知ることができます。

数の信条講解が記録されている。

本稿ではアウグスティヌスの信条講解の一つである『説教』213を取りあげ、「伝道者」アウグスティヌスが「福音の担い手」として受洗志願者へ伝達した信条の内容を見ていきたい。

## 『説教』213について

英訳をしたHillは、この説教がなされたのは410年の少し前のことであるとしている<sup>3)</sup>。またHillの英訳を載せている*Essential Sermons*の注を書いているDoyleは、『説教』212（410-415年）がなされた直前ということから410-412年頃としている<sup>4)</sup>。いずれにしても、アウグスティヌスがドナティスト論争に一区切りをつけ、ペラギウス論争が勃発し、司教としての働きに成熟していた410年前後の説教と想定してよいだろう。

ここで講解している信条は「ミラノ信条」である。387年にアウグスティヌスはミラノの司教アンブロシウスから洗礼を授かった。その時に教えてもらったのがこの信条であり、アウグスティヌスにとっても親しんでいた信条だろう。その「ミラノ信条」を用いてヒッポで受洗志願者への信条講解を行っているのが、この『説教』213である。

---

きる。洗礼式に至るまでのプロセスで、志願者に信条が伝達された（キュリロス『教理講話』5.12）。また、『使徒憲章』の7冊目（4世紀末のシリアの典礼の慣習を再現している）では、洗礼前の徹底した信仰指導が強調されている（『使徒憲章』39）。その他にも、ヨアンネス・クリュソストモス（396年にアンティオキアでなされたコリントの信徒への手紙15:29の説教）やモブスエステイアのテオドロス（『教理問答教育』）にも同様のことが見られる。西方では、ルフィヌスが『使徒信条講解』で報告しているように、ローマの教会では洗礼志願者は人々が聞いている中で信条を「復唱」することが一般的であった（『使徒信条講解』3）。アウグスティヌスも同様に、ローマにおいて信条の「復唱」がなされていたことを明らかにしている（『告白』8.2.4）。

3) J. E. Rotelle (ed.), E. Hill (translation and notes), *The Works of Saint Augustine: A Translation for the 21st Century*, Vol. III/6: Sermons 184-229Z, New Rochelle, New York: New City Press, 1993, p.147.

4) B. Ramsey (ed.), D. E. Doyle (introduction and notes), E. Hill (trans.), *Essential Sermons (The Works of Saint Augustine)*, New York: New City Press, 2007, p.264.

アウグスティヌスは別の信条も知っていた。それが「ヒッポ信条」であり、『説教』215には「ヒッポ信条」での受洗志願者への信条講解がなされている。この説教がなされた年代については、391年や395年から425年まで幅広い意見があるが<sup>5)</sup>、時期や状況に応じて、二つの信条をアウグスティヌスは使い分けているのだろう。

この『説教』213で講解されている「ミラノ信条」の再構成を以下に示しておく。

#### 【ラテン語】<sup>6)</sup>

Credo in Deum, patrem omnipotentem,  
et in Iesum Christum, filium eius unicum, dominum nostrum,  
qui natus est de spiritu sancto et virgine Maria,  
sub Pontio Pilato crucifixus et sepultus;  
tertia die resurrexit a mortuis;  
ascendit in caelum;  
sedet ad dexteram patris;  
inde venturus iudicaturus vivos et mortuos;  
et in spiritum sanctum,  
in sanctam ecclesiam,  
in remissionem peccatorum,  
carnis resurrectionem.

#### 【日本語訳】

私は全能の父なる神を信じます。

---

5) J. E. Rotelle (ed.), E. Hill (translation and notes), *The Works of Saint Augustine: A Translation for the 21st Century*, p.165 の注1を参照。

6) W. Kinzig, *Faith in Formulae: A Collection of Early-Christian Creeds and Creed-related Texts*. 4 vols., New York: Oxford University Press, 2017, § 316 (e)

また、イエス・キリスト、その独り子、私たちの主を  
聖靈と処女マリアから生まれ、  
ポンテオ・ピラトの下で十字架につけられ、葬られ、  
三日目に死者の中から甦り、  
天に昇り、  
父の右に座し、  
そこから来られ、生きている者と死んでいる者とを審かれます。  
また、聖靈を  
聖なる教会、  
罪の赦し、  
体の甦りを。

以下の『説教』213の訳では、上の「ミラノ信条」の日本語訳に合わせ、信条の言葉の部分にアンダーラインを引いた。古代の時代のどの信条講解の説教でもそうであるが、信条の言葉はひとまとめに示されずに、部分的に区切られて示された上で講解がなされた。それらのバラバラになっている信条の言葉をひとまとめにしたのが、信条を「再構成する」ということである。

翻訳にあたって、底本として G. Morin(ed.), *Sancti Aureli Augustini Tractatus sive Sermones Inediti ex Codice Guelferbytano 4096: Detexit adiectisque commentariis criticis primus*, Kempten & Munich, 1917, 1-11 のラテン語を用いた。J. P. Migne (ed.), *Patrologia Latina*, vol. 38, Paris, 1865, 1060-5 のラテン語も参照した（ただしこちらの Migne 版には最初の 1 と最後の 11 の部分が欠けている）。また、英訳である J. E. Rotelle (ed.), E. Hill (translation and notes), *The Works of Saint Augustine: A Translation for the 21st Century*, Vol. III/6: Sermons 184-229Z, New Rochelle, New York: New City Press, 1993, pp.140-9 とその注を参考にした。信条講解ではあるが、洗礼の直前に受洗志願者を集めてなされた「説教」であることを意識し、文体としては説教のスタイルとなるように心掛けた。ラテン語のニュアンスを伝える必要がある部

分、神学的に込み入った議論の部分などは注で補ったので参照していただきたい。

## 翻訳

### 信条について<sup>7)</sup>

1. 使徒は「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」（ローマ 10:13）と言っています。この救いに向かってあなたがたは駆り立てられ、あなたがたの名が受洗志願者に加えられたのです。救いは一時的なものではなく永遠のものです。救いは、私たちと動物との間で、また善人と悪人との間で共有されるようなものではありません。もちろんご存知の通り、一時的な救いに関しては、人間だけでなく大小の動物も含めて、その獲得のために多大な労力を費やしているのです。このことは大蛇<sup>8)</sup>からゾウやハエやミミズにまで及び、さらに言えば、神を呼び求める者であれ冒瀆する者であれ、変わることろはありません。

「主よ、あなたは人をも獸をも救われる。神よ、慈しみはいかに貴いことか。あなたの翼の陰に人の子らは身を寄せ」<sup>9)</sup>（詩編 36:7-8）と聖なる詩編には書かれています。つまり、この救いは神の多大な憐れみによって最も小さな動物にまで及んでいます。しかし人の子らは「あなたの翼の陰」で望みを抱くことでしょう。これが私たちの生涯をかけて行っていることです。私たちが後

---

7) 底本には De Symbolo (信条について) というタイトルが付けられている。Hill の英訳では「信条の伝達にあたって」というタイトルになっている。

8) 元のラテン語は draco であり、「ドラゴン」とも訳せる。当時のローマ人は様々な蛇（陸の蛇、海の蛇、神殿の守護に当たる蛇など）を想定していたようである。ここでの文脈は「draco からゾウやハエやミミズにまで及び」なので、大きい生き物のことが言われているので、「大蛇」と訳した。

9) 新共同訳では「身を寄せ」だが、元のラテン語は sperabunt (sepero 「(私は) 希望を抱く」の未来形の3人称複数形) であり、未来の希望のことが言われている。これがローマ 10:13 の未来形と呼応している。

に受け取れるものを望んでいるのです。この詩編は何を約束しているのでしょうか。「あなたの家に滴る恵みに潤い／あなたの甘美な流れに渴きを癒す。命の泉はあなたにあり」（詩編 36:9-10）とあります。命の泉とはキリストのことです。私たちが今その味をいくぶんかでも味わえるように、キリストは人となられたのです。その豊かさは天使と天の仕え人を十分に満たしていますが、私たちのためには取っておかれているのです。

これは後のことですが、そこに達するために、使徒が行ったことに従い、私たちが救われるために神を呼びましょう。「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」（ローマ 10:13）からです。預言者は以前からこう言っていました<sup>10)</sup>。けれども、使徒パウロは「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」というのが今や成就したと言っているのです。「なぜ主の名を呼び求める者が救われないのか」と言われた時のために、私はすでにそれがどのような救いなのかを述べました。「〔未来形で〕救われる」<sup>11)</sup>ということなのです。

次いで使徒自身がこう付け加えています。「ところで、信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう。『良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか』と書いてあるとおりです」（ローマ 10:14-15）。主の名を呼ばない者は誰も救われず、最初に信じなければ誰も呼ぶことができないのです。だから正しい順序は、まずあなたがたが信じ、その後で呼ぶことですから、今日あなたがたは信仰の信条（symbolum）を受け取り、それをあなたがたのものにすることです<sup>12)</sup>。八日の後、それがあなたがたの主を呼ぶ祈

10) ヨエル 3:5。

11) 元のラテン語は saluus erit (救われるだろう) という未来形である。冒頭のところから複数回ローマ 10:13 が引用されているが、それらもすべて saluus erit である。

12) ここでは順序のことが語られている。アウグスティヌスは今、信条（symbolum）の講解をし、受洗志願者に信条の伝達（traditio symboli）をしている。次の文に「八日の後」とあるが、一週間後のことであり、今度は主の祈りの講解が控えている。「正しい順序は、まずあなたがたが信じ、その後で呼ぶことですから」と語っているのは、信条 → 主の祈り

りとなることでしょう。

2. 信条 (symbolum) は信仰の基準 (regula fidei) を含んでいる要約であり、記憶に負担をかけることなく、心に教えることが意図されています。短い言葉で語られますが、そこから多くを得ることができます。それゆえ、信条 (symbolum) はキリスト者が自分自身を識別するためのもので、このことがまず私が説明しようとしていることです。次いで、主の許しがある限り、私があなたがたに保持していただきたいものを理解できるように明らかにしていきましょう。それこそが信条 (symbolum) なのです。

(ここから信条講解)<sup>13)</sup> 信条は「分量は」多くありませんが、「内容は」多いものです。単語数を数える必要はありませんが、重さを量る必要があります。「私は全能の父なる神を信じます」(Credo in Deum, patrem omnipotentem)。これをほんの一瞬で言うことができますが、どれほどの価値があることでしょうか。彼は神であり、父なのです。力ある神、善き父なのです。私たちの父なる神を見出した私たちは何と幸いなことでしょうか！だから私たちは彼を信じ、全能であるので、彼の憐れみに私たち自身のすべてを委ねましょう。そのことこそ、神を全能の父と信じる理由なのです。

誰も「彼は私のもろもろの罪を忘れることができない」「全能なのに彼はどうしてできないのか」と言ってはなりません。むしろあなたはこう言うべきです。「私は数多くの罪を犯してきました」。そうしたら私はこう言います。「でも、彼は全能なのです」。それでもあなたは言います。「解かれることも清められることもできない罪を私は犯してしまいました」。そうしたら私はこう言います。「でも、彼は全能なのです」。

---

という講解の順序のことである。まず、どのようなお方を信じるのかということを信条によって学び、その信じた方の名を呼ぶことを主の祈りによって学ぶのである。信条から主の祈りへという順序は、アウグスティヌスに限らず、古代教会では一般的だった。

13) ここに Et post symbolum: という標記がある。後世の写本家が「ここから信条講解(が始まる)」という注記を入れたのだろう。

詩編の中であなたがたが彼にどのように歌っているか注目してください。  
 「わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。  
 主はお前の罪をことごとく赦し、病をすべて癒し」(詩編 103:2-3)。このことが成り立つために、彼が全能である必要があるのです。

被造物全体が創造されるためにも、次のことが必要でした。大いなるものも小さきものも、天的なものも地的なものも、不死なるものも死にゆくものも、靈的なものも物質的なものも、見えるものも見えないものも、すべてのものを造られたのは全能者です。大いなるものも偉大であり、小さきものも決して小さいものではないのです。結局のところ、彼は望むものは何でも造ることができる全能者なのです。

いや、彼にできないことをお話ししましょう。彼は死ぬことができんし、罪を犯すこともできません。嘘をつくことも、欺くことも、誤ることもできません。彼にはできないことがたくさんありますが、もしそれらができたとしたら、偉大でも全能でもなくなってしまいます。だから、彼を信じて告白しましょう。「実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」(ローマ 10:10)。したがって信じる時には、あなたがたは信条を復唱して(*symbolum redditis*) 告白しなければなりません<sup>14)</sup>。ちょうど今保持したものを受けとめて、後で復唱できるように、決して忘れてはなりません。

3. 次は何でしょうか。「イエス・キリスト」です。「私は全能の父なる神を信じます」の次に、「イエス・キリスト、その独り子、私たちの主」(et in Iesum Christum, filium eius unicum, dominum nostrum) が続きます。もし独り子であれば、父と同等です。もし独り子であれば、父と同じ本質 (substantia) です。もし独り子であれば、父と共に全能です。もし独り子であれば、父と共に永遠です。これらのこととは、彼において、彼自身と共に、父と共にそうなので

---

14) 今、受洗志願者は信条の伝達 (traditio symboli) を受けている。一週間後に信条の言葉を暗唱して、信条の復唱 (redditio symboli) をしなければならない。なお、復唱の時の心構えは、この説教の最後のところで触れられている。

す。

私たちのための目的は何でしょうか。私たちにとっての益は何でしょうか。「聖靈と処女マリアから生まれ」(qui natus est de spiritu sancto et virginē Maria)<sup>15)</sup>。彼がどこに、誰のところに、誰のために来たのか注目してください。処女マリアを通して、人間の夫婦ではなく聖靈が働いたところであります。聖靈は貞節を守りながら彼女を宿らせたのです。このようにして主キリストは肉をまとわれ、人間を造った方が人間となったのです。自分になかったものを引き受け、あったものを失うことはなかったのです。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」(ヨハネ 1:14)。言が肉に変えられたのではなく、言のまま留まり、肉を受け、常に見えないものでしたが、彼は「わたしたちの間に宿」ることを望まれたのです。「わたしたちの間に」とは何でしょうか。人間の間に、ということで、彼は多くの人間たちの間の一人になられたのです。一人であり、独りでもあり、父の独り子でもあります。私たちにとってはどうでしょうか。私たちにとって独りの救い主であり、彼を除いて誰も私たちの救い主になれないのです。また、私たちにとって独りの贖罪者であり、彼を除いて誰も私たちの贖罪者になれないのです。金や銀ではなく、彼の血によるからです。

4. そこで、私たちが買い取られたその取り引きを見てみましょう。信条で「聖靈と処女マariaから生まれ」の次のところで言われているのは、彼が私た

---

15) アウグスティヌスは「ミラノ信条」をもとに信条講解を行っているが、アンブロシウスが示している「ミラノ信条」と比べると、この部分が微妙に異なる。アンブロシウスは spiritu sancto ex Maria virgine であり、ex (～から) という前置詞を処女マリアの前に置いている。アウグスティヌスは聖靈と処女マリアを et (と) で同列に並べている。なぜこのような違いが生じているのか。はっきりした理由は分からぬが、アウグスティヌスのここでの文脈からすると、神性がまったく損なわれずに人性を取ったことを強調しているため、et で結ぶことにこだわったのかもしれない。なお、この後の信条発展史からすると、現在の使徒信条「聖靈によりて宿り、処女マariaより生まれ」というように、聖靈と処女マariaを et で結ぶのではなく、分離させる傾向が強くなつていった。

ちのためにどんな苦しみを受けたかということです。「ポンテオ・ピラトの下で十字架につけられ、葬られ」(sub Pontio Pilato crucifixus et sepultus)。これは何でしょうか。神の独り子、私たちの主が十字架につけられたのでしょうか。神の独り子、私たちの主が葬られたのでしょうか。神としては変化することなく、殺されることもなかったのですが、人間として殺され、十字架にかけられたのです。「もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう」(Iコリント 2:8)と使徒は言っています。そして使徒は栄光の主を示し、彼が十字架につけられたことを告白しました。なぜなら、もし誰かがあなたの肌を傷つけずに服を引き裂くとしたら、その人はあなたを傷つけたのであり、あなたは服のゆえに「お前は私の服を引き裂いた」と叫ぶのではなく、「お前は私を引き裂いた、私を破壊した、私を切り裂いた」と叫ぶことでしょう。そう言っているあなたは真実を語っていますが、実際にはあなたの肉体は無傷なのです<sup>16)</sup>。

これこそ、主キリストが十字架につけられたということなのです。彼は主であり、父の独り子であり、私たちの救い主であり、栄光の主です。彼は十字架につけられ、肉において、肉においてのみ埋葬されました。つまり、彼が埋葬された場所や埋葬された時には魂はなく、肉体だけが墓に横たわっていたのです。それでもあなたがたは「イエス・キリスト、その独り子、私たちの主、聖靈と処女マリアから生まれ」と告白しています。この方はどなたなのでしょうか。イエス・キリスト、神の独り子、私たちの主です。「ポンテオ・ピラトの下で十字架につけられ」、この方はどなたなのでしょうか。イエス・キリスト、神の独り子、私たちの主です。「葬られ」、この方はどなたなのでしょう

---

16) *The Works of Saint Augustine* の英訳をしている Hill は、ここでの譬えを「神学的にはかなり薄氷を踏むような話である。これは、キリストの人性と神性という二つの本性が一つの位格に統合されていることを否定しているネストリオス主義とも解釈でき……」と注を付けている。たしかにこの段落だけを読めばそう受けとめられかねないが、次の段落では「私は服を認め、服をまとった方を礼拝するからです。肉体は彼の衣服だったのです」と語り、結局は神性と人性が結び合っているキリスト論を展開しているので、Hill の指摘は妥当性を欠くだろう。

か。イエス・キリスト、神の独り子、私たちの主です。肉体だけが横たわったお方を「私たちの主」と言うのでしょうか。もちろん、と私は言います。なぜなら、私は服を認め、服をまとった方を礼拝するからです。肉体は彼の衣服だったのです。なぜなら「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ」(フィリピ 2:6-7) たからです。

5. しかし肉体そのものを軽蔑しないようにしましょう。肉体が横たわった時、それは私たちが買い取られた時だからです。どのようにして買い取ってくださったのでしょうか。彼がそこにいつまでも横たわらなかったからです。というは、「三日目に死者の中から甦り」(tertia die resurrexit a mortuis) と信条は続くのです。私たちが彼の受難を告白したら、復活をも告白しましょう。彼は受難において何をなさったのでしょうか。私たちに忍耐を教えてくださったのです。復活において何をなさったのでしょうか。私たちに何を望むべきかを示してくださったのです。前者は業 (opus), 後者は報い (merces) です。つまり、受難においては業であり、復活においては報いなのです。

彼は死から甦って、そこに留まったままではありませんでした。何が続くでしょうか。「天に昇り」(ascendit in caelum) です。今はどこにおられるのでしょうか。「父の右に座し」(sedet ad dexteram patris) ておられます。右を適切に理解し、左を探さないようにしてください。神の右とは永遠の幸いと呼ばれ、言い表せず、計り知れず、理解し尽くせない祝福と幸福と呼ばれているのです。それが神の右であり、彼はそこに座しておられるのです。それにどういう意味があるのでしょうか。彼はそこに住んでおられます。結局のところ、皆が住んでいるところに彼が座しておられるのです。というのは、聖ステファノが彼を見た時、父の右に座しておられるというのは偽りではないからです。ステファノはどう言ったのでしょうか。「天が開いて、人の子が神の右に立つておられるのが見える」(使徒 7:56)。立つておられるのを見たのであれば、

「父の右に座し」と言っているのはどういうことでしょうか。彼が座していたというのは、そこに留まり、そこに住んでいたということなのです。どのように住んでおられたのでしょうか。あなたがたと同じようにです。なぜ立っておられたのでしょうか<sup>17)</sup>。誰がそれを説明できるでしょうか。彼が教えてくださったこと、私たちが知っていることをお話ししましょう。

6. それは何でしょうか。「そこから来られ、生きている者と死んでいる者とを審かれます」(inde venturus iudicaturus vivos et mortuos)。審判者を恐れずに、救い主を告白しましょう。ただ主を信じ、彼の戒めを行い、彼を愛する者は誰でも、彼が生きている者と死んでいる者とを審くために来られる時に、恐れることはないからです。恐れるどころか、到来を待ち望むでしょう。結局のところ、私たちが待ち望んでいる愛するお方の到来にまさる幸いがあるでしょうか。

しかしながら、彼が私たちの審判者でもあるため、恐れる必要もあります。私たちの審判者は、今や私たちの弁護者でもあります。ヨハネに聴きましょう。「自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にありません。自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます」(I ヨハネ 1:8-9)。「わたしの子たちよ、これらのことと書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです」(I ヨハネ 2:1-2)。もしあなたがある審判者によって審かれ、弁護者の手引きを受けるなら、あなたは弁護者に受け入れられ、彼は最大限のことをしてくれるでしょう

---

17) 信条では「座し」であるのに、ステファノは人の子が「立って」おられるのを見た。この矛盾をどう考えればよいかとアウグスティヌスは問い合わせをしている。この箇所でまずアウグスティヌスは、「座す」ことは「住む」ことだと解釈する。そして次の箇所で、審判者また弁護者として「立ち上がられた」のだと解釈している。

う。そしてもし彼が弁護者のままで審判者として来られると聞いたなら、あなたの喜びはどんなに大きいことでしょうか。少し前まであなたの弁護者だったお方が、今や審判者となってくださるのです。彼ご自身が私たちのために祈ってくださいり、私たちのために執り成してくださるのです。私たちのために彼が弁護者でいてくださるのですから、審判者として恐れる必要があるでしょうか。それどころか、私たちには弁護者が派遣されているのですから、審判者の到来をも待ち望むことができるのです。

7. これをもって、「イエス・キリスト、神の独り子、私たちの主」(Iesum Christum, filium Dei<sup>18)</sup> unicum, dominum nostrum) の部分が閉じられます。その後、「聖靈」(et in spiritum sanctum) が続き、父・子・聖靈の三位一体が完成するのです。しかし子については、子が人となられたために、多くのことが語られています。子である言は肉となったのであり、父や聖靈がそうなったのではないのです。しかし三位一体の全体が子の肉を造ったのです。三位一体の働きは切り離すことができないからです。それゆえ、聖靈が子よりも小さいとか、父よりも小さいなどと受けとめないでください。父・子・聖靈全体で三位一体であり、唯一の神なのです。そこにはまったく距離がなく、まったく違ひもなく、まったく欠陥もなく、まったく対立もないのです。父・子・聖靈は常に等しく、目に見えず、変化することがないのです。どうか三位一体が多くの罪から私たちを救い出してくださいますように。

8. ここからは特に私たちにかかわることが続いていきます。「聖なる教会」(in sanctam ecclesiam) とあります。聖なる教会こそ、私たちのことです。しかし私が言っているのは、ここにいて私の話を聞いているあなたがただけが「私

---

18) 波線は本城。この部分の注解を最初に行った時には Iesum Christum, filium eius unicum, dominum nostrum 「イエス・キリスト、その独り子、私たちの主」であったが、ここでは Dei 「神の」となっている。ちなみに eius は単数属格（男性／女性／中性で共通）で「彼の」と訳せるが、現在の使徒信条の一般的な訳に合わせて「その」と訳した。

たち」である、というわけではないのです。神の恵みによってこの町のこの教会にいる私たちもそうだし、この地方にいる人たちもそうだし、この州にいる人たちもそうだし、海の向こうにいる人たちもそうだし、全世界の人たちもそうだし、「日の昇るところから日の沈むところまで、主の御名が賛美されるよう」(詩編 113:3) とある通りなのです。このような公同教会 (ecclesia catholica)<sup>19)</sup> こそ、私たちの真の母であり、花婿の真の配偶者なのです。

彼女は主の花嫁ですから、彼女に敬意を表そうではありませんか。私はどう言い表せばよいのでしょうか。花婿の偉大さはこれまでになかったし、聞いたこともなかったことです。彼女は娼婦でしたが、彼は彼女を処女にしたのです。彼女は娼婦だったので、救い出してくださった慈愛を否定してはいけないのです。偶像や悪魔の後を追って姦淫したのに、どうやって娼婦でなくなったのでしょうか。心の姦淫はすべての人の中にあり、肉のほんのわずかな部分にもあり、心のすべてにもあるものです。彼はそこに来られ、そこを処女にし、教会を処女にしたのです。信仰において彼女は処女なのです。肉における処女は、わずかな修道女しかいません。信仰において、彼は女も男もすべて処女にするのです。教会には貞節と純潔と聖性がなければならないのです。

それでは、教会がどのようにして処女となったか、知りたいでしょうか。自分ではなく花婿を愛する忠実な使徒パウロの言葉に耳を傾けてください。「わたしはあなたがたを純潔な処女として一人の夫と婚約させた」(Ⅱコリント 11:2)。彼は教会について語っているのです。どの教会のことでしょうか? この手紙はどの教会にも当てはまります。「わたしはあなたがたを純潔な処女として一人の夫と婚約させた、つまりキリストに献げたからです。ただ、エバが蛇の悪だくみで欺かれたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔とからそれてしまうのではないかと心配しています」(Ⅰコリント 11:2-3)。墮落するのを恐れているなら、あなたは処女だということになります。「エバが蛇の悪だくみで欺かれたように」「心配しています」とパウ

---

19) 信条の言葉には含まれていないが、ここに *catholica* 「公同」という言葉が出てくる。詩編の引用にもあるように、全世界で同じ信仰に立っている意味として用いられている。

口は言いました。蛇はエバと肉体的な関係を持ったのでしょうか。〔そうではありませんが〕蛇はエバの心が処女であることを消し去ってしまったのです。「あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔とからそれでしまうのではないかと心配しています」とある通りです。

それゆえ、教会は処女なのです。処女であり、処女のままであるべきです。誘惑者に気を付け、堕落しないようにしましょう。教会は処女です。おそらくあなたは私にこう尋ねるでしょう、「もし彼女が処女なら、どうやって子どもを産むのですか。子どもを産まないなら、その胎内から私たちが生まれて、どのように私たちの名前が付けられるのでしょうか」。

私はこう答えます。彼女は処女でありながら、産むことができるのです。彼女は主を産んだマリアに倣うのです。処女である聖マリアは産み、処女のまま留まったではありませんか。これと同じく教会も産むことができますし、処女のまま留まることもできます。そしてよく考えていただければ分かりますが、洗礼を受けた者たちはその部分になるため、キリストを産んだことになるのです。「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」(Iコリント 12:27)と使徒が言っている通りです。それゆえ、もし彼女がキリストの部分を産んだのなら、彼女はマリアに似通っているのです。

9. 「罪の赦し」(in remissionem peccatorum)について、もしこれが教会になかったなら、希望がまったくなくなってしまうことでしょう。もし罪の赦しが教会になかったなら、将来の命や永遠の解放の希望がまったくなくなってしまうことでしょう。この賜物を教会に与えてくださったことを神に感謝しましょう。あなたがたはもうすぐ聖なる泉に至り、救いの洗礼で洗われ、再生の水で新しくなろうとしているのです。あなたがたはもはや罪がなくなり、浴槽から出てくるでしょう。過去にあなたがたを苦しめていたものは、すべて消し去られるのです。エジプト人がイスラエルの民をそうしたように、あなたがたの罪も追いかけてくるでしょう。しかし追ってくるのは紅海(mare Rubrum)<sup>20)</sup>までです。紅海までとはどういうことでしょうか。キリストの十字架と血によっ

て聖別された泉ということなのです。

赤いものは赤いからです。キリストの部分が赤くなっているのが見えないでしょうか。信仰の目で見てください。もし十字架が見えるなら、血も見えるはずです。十字架に架けられているものが見えるなら、流れているものも見えるはずです。キリストの脇腹は槍で突かれ、私たちの代価が流されたのです。だからこそ洗礼はキリストのしるしであり、紅海を通ったかのように水に浸されるのです。あなたがたの罪があなたがたの敵なのです。罪は付きまとってきますが、それは海までです。あなたがたが海の中に入つて逃れると、罪は滅ぼされるのです。イスラエルの人たちが乾いた地を通つて逃げた時、水がエジプト人を覆いました。聖書には何と書かれているでしょうか。「生き残る者はひとりもなかった」（詩編 106:11）とあります。あなたがたは多かれ少なかれ罪を犯し、大きな罪であれ小さな罪であれ犯してきましたが、違いはありません。「生き残る者はひとりもなかった」のですから。

しかし、私たちはこの世界で生きていくのですから、そこでは罪なく生きている者はいません。したがつて、罪の赦しは聖なる洗礼の清めだけにあるのではなく、八日の後にあなたがたが受け取ろうとしている日々の祈りである主の祈りの中にもあるのです<sup>21)</sup>。その中にはいわば日々の洗礼があり、この賜物を教会に与えてくださったことを私たちは神に感謝し、信条においてそのことを告白しているのです。そのようなわけで、私たちが「聖なる教会」と言った時には、〔直後に〕「罪の赦し」を加えているのです。

---

20) 字義的な意味は「赤い海」。ここでの「赤」が、続く議論に出てくるキリストの血の「赤」に対応している。

21) 上述の注12でも触れた通り、一週間後に主の祈りの講解が控えている。ここでは信条と主の祈りとの神学的な繋がりにアウグスティヌスは触れている。すなわち、「罪の赦し」は洗礼を受けることによって得られる。しかしその赦しは洗礼前の罪のことである。洗礼後に犯す罪は主の祈りの「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」を祈ることによって赦される。このことは一週間後の主の祈りの講話（『説教』56, 57, 58, 59）で詳細に説明されている。

10. その後は「体の甦り」(carnis resurrectionem) です。これが最後ですが、体の甦りは終わりなき終わりです。甦った後には体の死ではなく、体の痛みもなく、体の苦しみもなく、体の飢えや渴きもなく、体の苦悩もなく、体の老いや衰えもありません。だから、体の甦りを恐れる必要はありません。体の良いところを見て、悪いところは忘れるようにしましょう。肉的にはどんなに不平不満があったとしても、その時にはもうなくなってしまうのです。私たちは永遠の存在であり、「天使のようになる」(マタイ 22:30) のであり、聖なる天使たちと同じ市民権を持つのです。

私たちは主のものになり、私たちは彼の嗣業であり、彼も私たちの嗣業になるのです。なぜなら、私たちは彼に「主はわたしに与えられた分」(詩編 16:5) と言い、私たちについて子には「求めよ。わたしは國々をお前の嗣業とし」(詩編 2:8) と言われているからです。私たちは嗣業を持ち、嗣業となります。私たちは保持し、保持されるのです。何と言ったらよいでしょうか。私たちは崇拝し、耕されるのですが、私たちは彼を神として崇拝し、私たちは畑のように耕されるのです<sup>22)</sup>。

私たちが耕されていることを知るために、主の言葉に耳を傾けましょう。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」(ヨハネ 15:1)。もし彼が農夫なら、畑を耕しているはずです。どの畑でしょうか。私たちを耕しておられるのです。この目に見える地上の農夫は、耕すことも、掘ることも、植えることも、水を見つけさえすれば撒くこともできます。しかし雨を降らせることはどうでしょうか。成長させ、芽を出させ、地に根を張らせ、風を吹かせ、力強く枝を張らせ、実を実らせ、葉を茂らすことが〔地上の〕農夫にはできるでしょうか。しかし私たちの農夫である父なる神は、これらすべてが私た

---

22) この文の原文は colimus, et colimur; sed colimus ut deum; colimur ut ager である。ラテン語 colo には「崇拝する」と「耕す」の両方の意味があり、アウグスティヌスは一つの colo という言葉で二つの意味を持たせて語っている。すなわち、彼を「私たちは礼拝し (colimus)」、彼によって「私たちは耕される (colimur)」。日本語では再現不可能だが、アウグスティヌスは同語から別の意味を汲み出すラテン語をうまく使っているのである。

ちにおいておできになるのです。なぜでしょうか。私たちは「全能の父なる神」を信じているからです。だから私たちがあなたがたに示したことを保持してください。神がいかに喜んで与えてくださるかを私は示しました。

11. 八日の後、あなたがたが今日手渡されたものを復唱しなければなりません。あなたがたの準備が整うように、あなたがたを指導してくれる両親<sup>23)</sup>による手引きを開始していただきましょう。この場所での祝福の祈りのために、鶏の鳴く時刻にどのように目覚めたらよいか、あなたがたに教えてくれるでしょう<sup>24)</sup>。それでは、ここに示した信条（symbolum）を熱心に暗記することから始めましょう。しかし誰も動搖してそれを復唱することができない状態になつてはいけません。安心してください、私たちはあなたがたの父なのですから。学校の先生のように棒や鞭を持っているわけではないのです。たとえ言葉を間違うことがあっても、信仰において間違わないようにしてください。

(ほんじょう・こうた)

---

23) ラテン語は Parentes である。もちろん実の両親の場合もあったかもしれないが、受洗志願者には信仰の指導をしてくれる Parentes がつけられた。これは複数形であり、二人の親だけでなく、さらに広い範囲が考えられていた可能性もあるだろう。Hill は、この後にアウグスティヌスが語っている「安心してください、私たちはあなたがたの父なのですから」の「私たち」を「すべての信者たち」のことだと指摘している。

24) この文が何を意味するのかはよく分からない。イースター当日の洗礼に至るまでの靈的生活の指導の一部分なのか、イースター前夜の何らかの儀式のことなのか不明。